

# ご存知ですか？

## この山陰歌人

北井由香

奥原碧雲（おくはら・へきうん）、河野翠澁（こうの・すいれん）、能海紫星（のうみ・しせい）——この三人は、いずれも島根県出身であり、「明星」に関わる歌人である。

「明星」とは、与謝野鉄幹の主催した新詩社が明治三十三年に創刊した詩歌雑誌であることは、ご承知の通りだろう。

**奥** 原碧雲（本名福市）は、明治六年に八束郡秋鹿村（現松江市岡本町）に生まれる。明治二十七年に島根県尋常



師範学校を卒業後、飯石郡三刀屋村尋常高等小学校訓導となる。二十九年に郷里の学校（八束郡秋鹿村岡本尋常小学校）に転任し、やがて同校の校長に。地域の青年教育や女子教育にも尽力し、秋鹿図書館、八束図書館を創設するなど社会教育にも意を注いだ。

また若いころから文才があり、「明星」や「文庫」に短歌が掲載される。三十五年には、「明星」の出雲支部を設け、歌会「しのめ会」も結成。地方文芸誌「ミチシホ」「銀鈴」などの地方文芸誌にも

作品を発表した。三十八年には、島根県嘱託として竹島を視察し「竹島及鬱陵島」を著した。その他にも数多くの著書を残しており、主なものに「島根県名勝誌」「八束郡誌」「日本海大海戦」「島根県名勝案内」などがある。

碧雲は、歌人としても、学校教育者や社会教育者、郷土史研究者としても名を遺した人物である。

**河** 野翠澁（本名岩雄）は、明治十七年に邑智郡田所村（現邑南町田所）に生まれる。明治三十三年、弱冠十六歳にして「明星」第六号に作品が掲載される。その後も「明星」に連載されるのだが、その数は実に百二十余首を誇った。

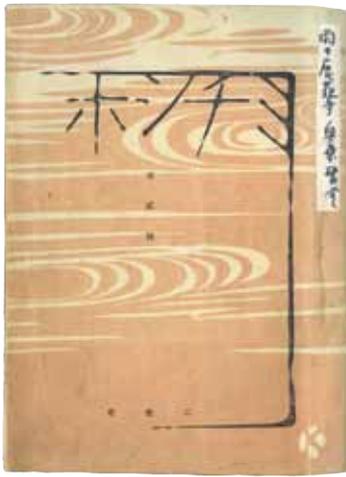
また、同じ年に村にあった興風会歌会に参加、関西青年文学会の「よしあし草」にも俳句・短歌を投稿した。十七歳の時には、鳳晶（後の与謝野晶子）らとともに神戸の「神戸又新日報」に短歌を発表。明治三十五年、与謝野鉄幹に師事していた翠澁は、十八歳で「明星」の石

見支部を開設、短歌や新詩体の創作に打ち込んだ。明治三十七年九月には、文芸雑誌である「銀鈴」を創刊。石見地方の詩歌人たちに発表の場を設けた。「銀鈴」は、三十六号（明治四十二年六月）まで続いた。

翠澁は、五十七歳で亡くなったのだが、山陰文芸の発展・興隆に目を見張る活躍をしたと言える。

**能** 海紫星（本名清一）は、明治十八年に八束郡本庄村（現松江市本庄町）に生まれる。早稲田大学英文科に進み、東京の新聞社に勤務する。数年後に帰郷し、明治四十四年から村役場の書記を勤める。その傍らで歌作にも励んだ。在京中に新誌社に入り「明星」や「新潮」に歌を投じた。「明星」には、終刊となる明治四十一年十一月まで詩や短歌を発





表している。大正三年から前田夕暮の「白  
日社」社友となり、作品を雑誌「詩歌」  
に発表するようになったが、翌年の大正  
四年に三十一歳の若さで亡くなった。  
紫星の死は、師である前田夕暮にも非  
常に惜しまれ、「詩歌」第六卷一号（大  
正五年一月一日発行）に「故能海紫星君  
の歌」と題して紫星の短歌八十一首が掲  
載された。

また「アララギ」（大正五年一月号）  
茂吉選六首のなかの最後の一首に「能海  
紫星を痛惜す」と註書した次のような短  
歌もある。

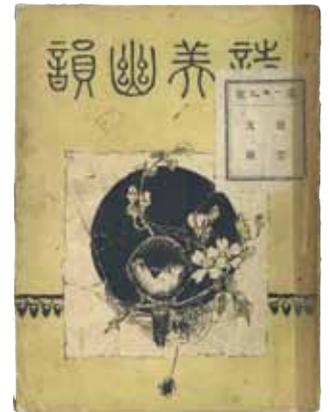
吾さきに小野三郎を喪ひつ

今や紫星とわかるるあはれ

（朝日山薫）

これらのことから紫星は歌壇から注  
目されていたことが伺える。しかし、地  
方歌壇には、あまり顔を出さなかったこ  
ともあり、地元ではさほど知られていな  
かったようだ。

さて、本学では、この三人のご遺族の



方々より貴重な資料を寄贈していただい  
た。先の文中でも出している「銀鈴」「ミ  
チシホ」「文庫」「明星」などもその一部  
である。貴重な資料であるため、普段は  
棚の中に入れていて表に出すことがあま  
りない。活用とまではいかなくてもこの  
ような資料があるということを知っても  
らいたいと思い、今回紹介した。目録も  
作成しているのでそちらも是非ご覧いた  
だきたい。

（きたい・ゆか／本学図書館司書）

—— 参考文献 ——

- 山崎克彦『石見人物記』一九八九年。
- 山崎克彦『石見と文学』一九九四年。
- 本田秀夫著『島根の歌人』報光社、  
一九八〇年。
- 山陰中央新報社編『島根県歴史人物事典』  
山陰中央新報社、一九九七年。
- 島根県教育委員会編『明治百年島根の百  
傑』島根県教育委員会、一九六八年。
- 寺本喜徳『山陰文芸襍記』島根県立島根  
女子短期大学国語国文会、一九九九年。
- 加藤克巳『現代短歌史』砂子屋書房、  
一九九三年。

所蔵資料（抜粋）

	表題	著者名	用紙・書型 書式・装訂	分量	執筆年
奥原碧雲 関連	与謝野鉄幹先生添削附 歌稿 寒梅 1 枚	奥原碧雲	半紙本 筆写 結び綴じ	194 丁	明治 33 ~ 36 年
	島根県遊覧案内 原稿		半紙製原稿用紙 筆写 結び綴じ 無表紙	57 丁	明治 40 年
	出雲国神社巡拜記		菊判原稿用紙 結び綴じ 無表紙	44 丁	
	明治歌集 第三編	佐々木信綱撰	変形 46 判	208 頁	明治 27 年 7 月 30 日
	詩美幽韻	河井醉茗編纂	菊判 32 取	129 頁	明治 33 年 7 月 15 日
	八束郡名勝誌	八束郡教育委員会編纂 編集委員 奥原福市	46 判	156 頁	明治 45 年 6 月 1 日
	島根縣案内	島根県	B6 変形判	98 頁	昭和 4 年 4 月 1 日
	ミチシホ第壹号	中村吉太郎	B6 変形判	38 頁	明治 36 年 12 月 16 日
	ミチシホ第貳号	中村吉太郎	B6 変形判	40 頁	明治 37 年 2 月 6 日
	明星	主筆与謝野鉄幹	タブロイド判	16 面 20 面 20 面	明治 33 年 4 月 1 日 明治 33 年 5 月 1 日 明治 33 年 7 月 1 日
河野翠激 関連	作文帳及び作例帳 与謝野寛先生修補 詩	河野岩雄 翠激作	半紙半折 筆写 半紙本 筆写	7 丁 52 丁	明治 29 年 1 月 自明治 34 年至同 36 年
	銀鈴 第 1 号 ~ 終刊号 (36 号)	銀鈴社	結び綴じ 巻紙 3 枚 活版印刷本 合本全 4 冊		明治 37 年 9 月 ~ 42 年 2 月
	河野岩雄宛書状及び封筒	与謝野晶子	活版刷り	1 通	昭和 4 年 12 月 25 日
能海紫星 関連	海に親しむ心 < 私家版歌集 >	能海紫星	自家用特製原稿用紙 細字ペン書き	86 枚	大正 4 年
	春の悲しみ < 私家版歌集 >	能海紫星	自家用特製原稿用紙 細字ペン書き	74 枚	大正 4 年
	初夏の陽 < 私家版歌集 >	能海紫星	自家用特製原稿用紙	78 枚	大正 4 年

の [t] や [i]d] の発音も注意、“a lot of” は何度も練習、最後は「アラダブ」っぽくなって OK。

そうこうするうちに、乃木小学校での通行手形にもなるユニフォーム（ポロシャツ）の色選び、デザイン決めに急がなければならない時期になってしまった。色は色々な人に意見を求め、絵は K さんの描いた絵に決まり、ぎりぎりのところで注文し、出来上がりは初回の前日午後だった。とにかく滑り込みセーフ。

読みの早さを調整し、どう「間」を取るか。読み始めるとついストーリーの中身より、読んでいる英語の文字に神経を注いでしまいがちになる。暗記したつもりでも文字で確認してしまう。読み手のジェスチャーはどの程度が適切か、制限時間の 10 分を上手に使えるか。かみしばい本体をどのように持つか、絵を指し示す時の手の位置は絵を隠してしまわないか。様々な最終チェックをし、本番初日を迎えた。



**平**成 21 年 6 月 24 日水曜日、朝 8 時 05 分、乃木小図書室集合。6 年生 5 クラス担当。日本語での「絵本の読み語り」グループは既に発表の回数を重ねていて、余裕有り気に見える。出来たての黄色いポロシャツを着たチーム・イエローは、うーん。とにかく「部活並みの練習」をしてきたから、自信を持って、大きな声で、そして笑顔を忘れずに。

時間になり各教室へ移動。ほぼ練習通りの出来映えだった。終わったときには、皆興奮気味だった。緊張も力になる。こだわりのアーティスト M 君は、最後の最後に作った「指し棒（ネズミ付き）」を担当の先生や子ども達に褒めてもらい、満足気。「大きな声で、発音も良くて、絵と一緒にだったのでわかりやすかった。英語でこんなことができるなんてすごい。自分も英語でやってみたい」との 6 年生の感想に、次回に向けての力をもらった。

そして、また練習。第二回目 7 月 1 日は大雨だった。



車で通学の学生は渋滞にあい、集合を待つ身はハラハラだった。しかし何とか時間までに皆集まり、いざ出勤。6 年生 5 クラスの、担当クラスを変えての挑戦となった。担当者は初回のペアあり、2 回目のペアありだった。英語活動担当の先生が巡回してくださった。先生のコメントを学生に伝える。「英語を暗記して、もっと大きな声で、絵をもっと大きく、見やすく」。

**そ**して、また練習。最後の活動となるので悔いの残らないように、練習にも力が入る。第三回目の 7 月 8 日は 3 年生 5 クラスを担当。学年が下がるため、みんな一層わかりやすいプレゼンテーションを工夫して臨んだ。工夫した部分はそれなりの反応があり、「寝たろう」のいびきでは笑いも起こった。笑いは発表者と聴き手双方の緊張をほぐしてくれるし、時間を共有している実感を持てる。

「小学生が静かに聞いてくれ、やりやすかった」「ほめてくれて嬉しかった」「貴重な経験になった」「英語の発音にこれほど注意したことはなかった」というチームの感想だが、今回のような実践活動ができたその経験は、自分たちのしてきたことに対する自信になり、もっと上手く伝えたい、もっと勉強しなくては、という思いに繋がっていった。この機会を与えてくださった乃木小に、そしてしっかり聞いてくれた小学生に感謝。

（こだま・ようこ／アメリカ文学）



# チーム・イエローの「英語でかみしばい」



小玉容子

チーム・イエローこと「キッズイングリッシュ & ストーリーテリング」受講生は6月末から7月にかけて、松江市立乃木小学校での「朝の読み語り」活動に参加させていただいた。「キッズ」授業の目的は、幼児・児童英語教育の方法・教材研究および教材作成と教育実践だ。グループ名の由来は写真でご覧の通り、単純そのもの。この単純な精神で、色々な困難はあったものの、それらを乗り越え、実践へとこぎつけ、(自己)満足感と共に活動を終えることができた。

「教えることによって学ぶ」。“Docendo discimus (ラテン語)”「ドケンドー・ディスキムス」と読む。Docendoは「教えることによって」、discimusは「学ぶ」を意味する。教えることができたかは別として、学ぶことはできたと思う。これは、その記録である。

**手**作り「かみしばい」を持ち込んで、英語での読み語りだ。多くの大学生がそうだと思うが、チーム・イエローの皆も、人前で、それも小学校の教室で子ども達を前にして、英語をしゃべることは恥ずかしい。苦手意識や不安もあった。しかし、皆で前向きに取り組んでいった。選んだストーリーは「ももたろう」、「ねずみの嫁入り」、「かさじぞう」、「三年寝たろう」の日本昔話4話。受講生16人が4グループに分かれ、「かみしばい」の作成からスタート、いや、英語のストーリーの聞き取りからスタートした。

ディクテーションといって、英語を聞いて書き留めて

いく。繰り返し何度も聞くことで英語耳が訓練され、発音も自然に良くなるはずである(あった)。それが済むと、今度こそは「かみしばい」の作成だ。「絵を描ける人なんかグループにいないのにどうしたらいいの?」から「鬼は(グループの4人が)一人一人担当して、鬼の個性を出そう」という平等派、何も言わずに自前の50色もある色鉛筆一式を持ち込んで、ただただ黙々と取り組むグループ、家に持ち帰り作業を続けたグループなど、反応・取り組みは様々だったが、とにかく描き続けた。どんな絵を描けば英語での「語り」の補助となるか、どんな絵なら楽しんでもらえるか、物語のエッセンスを失わないように、など色々工夫しながら描いていった。

5月の第2週から下絵を描き始め、6月初旬にはなんとか形にはなったが、完成と言える状態ではなかった。実際に絵を使って「読み語り」をしてみると、細かな英語表現を伝え切れていない部分も出てきて、絵の修正や補強をした。絵ができれば後は楽、と考えていたが、それは甘い考えだった。とにかく次の段階へ。

**絵**を足したり、プレゼンの工夫をしたりしながら、延々と読みの練習が続いた。「読む」という姿勢ではなく「暗記」しないと、聞き手に語りかけることが難しいこともわかった。そして、難しい発音を繰り返し練習し、文の抑揚、登場人物の<sup>こわお</sup>声音なども入念にチェックした。“whole world”の“w”は唇を丸めて、“l”は舌先を上<sup>こわお</sup>の歯の裏に。“walk”じゃなくて“work”。“-ed”



# 松江ぶらりロード

～北堀・石橋・奥谷～



(萬壽寺)  
緑と建物が一体となっていて美しい。

## 石橋町

江戸時代、石橋町は橋北の街並みの東端に位置し、商人と職人の町として栄えました。また、町内に大井戸があり、良質の水が豊富に得られたために、水を使う商いも多いです。街路は、お城を守るために、狭く鉤の手になっています。春を告げる千手院の枝垂桜や「鬘行列」の代表的存在が有名です。

建築・街づくりゼミ

梶谷恵美子・亀岡果奈・花岡ひとみ・矢島優子



(千手院に上る階段の風景)  
紫陽花と石の灯籠との相性がよく緑がたくさんあり美しい。

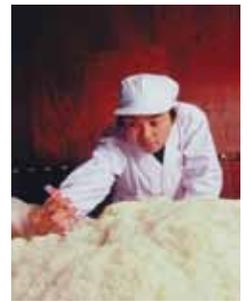


(千手院からの眺め)  
松江の街並み全体を眺めることができる場所。



## 李白

◎醸造元李白の息子・佑一郎さん  
「新しい酒質の酒をつくりたい」と杜氏と一緒に未来に向かって挑戦しておられます。妹の路子さんも石橋の散策地図などをつくってお兄さんを応援しておられます。



## 千手院



(千手院の下にある醤油屋さん)  
赤く塗った壁が印象的。近くを通ったときに、お醤油のいい匂いが味わえる。



(原田本店)  
清酒都乃花が有名で、建物が渡り廊下でつながっており、入り口の大きな壺が目印。廃業が残念。



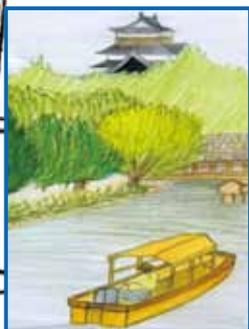
(原田本店の裏にある小道)  
物静かなこの通りでは、時間を忘れてゆったりと歩くことができる。



堀端の家



◎柴田さん  
昔は、北堀商店街ですべての買い物ができたが、現在は寂れて残念です。お城やお堀を見ながら暮らせます。前・中・後丁の謂われなど故事を大切に、今後も北堀の街並みを大切にしていきたい。



北堀橋からの眺め



北堀の家

松江らしい風情を楽しみ、街をゆったりと散策できる。——武家屋敷から明々庵を抜け、北堀・石橋・奥谷を回遊する新しいルート「松江ぶらりロード」と名づけ、その魅力を探索しました。このマップを元に街歩きをして魅力的な場所を見つけてください。

萬壽寺



(春日神社)

可愛い狛犬や干支それぞれの像が出迎えてくれる。

春日神社



桐岳寺

(桐岳寺)

ユニークなお地蔵さんが来客を楽しませてくれる。

## 奥谷町

石橋町から萬壽寺に向かう街路がメインの道路で、両側の家並みが美しいです。北堀と異なり、竹やまきの生垣も多く、山に囲まれて自然と調和した街並みです。中心に田原神社(春日神社)があり、萬壽寺、桐岳寺など大きな寺があり、住宅地ながら魅力に富んだ街です。



(明々庵)

指定文化財にも登録されている有名な茶室。

明々庵



(明々庵の城見台からの眺め)



(塩見縄手の歩道)

松や草木など植物が多く、通る人の目を楽しませている。



(小泉八雲記念館)

お蕎麦屋さんもあり、松江を堪能できる建物群。



(明々庵に向かう途中の民家) 玄関への小道にかかる大きな松が魅力的。

## 北堀町

北堀町は江戸時代、中級の武士が住んでいたところです。門構えと板塀が基本となっています。道路幅に対して両側の建物の高さが同じくらいで、スカイラインがそろい、快適で落ち着いた街並みです。



◎春日神社・藤脇宮司さん

田原神社(春日神社)は、本殿に2つの神様を並列して祀っているのが珍しい。お殿様の駕籠を担いで一段一段上ったために、石段の幅は広く、勾配が緩やかになっています。



# いけびんストア

(境港市)

## 商店 探訪

④

中重 彩

人気漫画・アニメ「ゲゲゲの鬼太郎」の町として有名な境港にひとときわ間口の広い、ちょっと変わった店がある。ここはいわゆる「なんでも屋さん」。昭和四年から続く「いけびんストア」の名物おじいさん、池瀏覽一朗さんを訪ねた。

JR境港駅から水木しげるロードを歩いてすぐのところに「いけびんストア」はある。店の正面中央には、鬼太郎の鈴やかレー、文房具など鬼太郎グッズが並べられていて、通りを歩く人が足を止めて眺めている。店には果物や花、卵、のり、インスタントラーメン、調味料、酒、洗剤、電球、トイレットペーパーなど、ほんとうにいろんなものが置いてある。

### 何のストア？

なんでこんなに置いてあるものがバラバラなんだろう？ そんな疑問を持っていた私は、おじいさんに、「このお店は

何屋さんになるんですか？」と聞いてみた。返ってきた答えは、「野菜、果物、花、お土産を置いてて……」。一言では言い表せないのが、このお店なのだ。

その理由は後に話を聞く中で、理解することが出来た。お店の床には十キロがネットでひとまとめになった玉ねぎが置いてあり、スイカが床にゴ



ロンと転がっている。今でも、量り売りで野菜を販売しているのだそうだ。「今、届いたばかりだから整理が出来ていない」。四十年この店で働く女性事務員さんが、慌てて付け加えられた。

「いけびんストア」では、おじいさん、おばあさん、娘さん夫婦、お孫さんの家族五人と事務員さんひとり、アルバイトひとりの計七人が働いている。今は、ほとんどを娘さん夫婦に任せているが、それでも大事なことは社長のおじいさんが決めている。

### 幅広いお仕事！

お話を聞く中でわかったことなのだが、「いけびんストア」は店舗での小売り以外にも、地域と関わったお仕事をされている。一つは、「港の特典」だと



話す、船舶食料納入店。つまり、外国から来た船員の食料や、自国へ持って帰る品を届ける仕事をされている。境港では唯一の店で、ロシアや韓国の船からの注文が多いそうだ。

三年ほど前までは、北朝鮮の船が一日に五、六隻も来ていて、とても忙しかつたと話してくださいました。

酒、タバコの「免税店」は、外国の船員さんに「税抜きの商品が欲しい」と言われたことがきっかけで始まった。船員さんが船を下りて、直接店に買い物に来

てくれることもあるのだという。

二つ目は、地元の小学校、保育園、老人ホーム、自衛隊施設などの給食の食材を調達し、配達することだ。仕入れは市場で行う。おじいさんも前は仲買人として朝五時から仕事をされていた。セリの腕前はかなりのものだったと、得意顔をされた。

そういう会社だから、店の中に大袋の野菜が無造作に置かれていたのだった。年中無休で朝七時から夜の八時まで営業しているが、店と住まいが一緒に、家族で代々店を切り盛りしているからこそできることだ。

### 「いけびんストア」の歴史

今から八十年前、「いけびんストア」の前身はスタートする。周囲の人からは「白イカ屋」、「イカ屋」と呼ばれていた。当時、扱っていたのは海産物の加工品だった。主には、生の白イカを仕入れ、ハラワタをとり、干して、干しイカにして販売していた。他に、ワカメやノリ、カラシマ（田作り）などを扱っていた。

境港は、アメリカや韓国や「満州」などに多くの移民を出している。遠くにいる家族の元に日本の味を届けるため、この海産物を贈る人が多くいた。また、大阪あたりから美保神社へお参りに来た人が買いに立ち寄っていた。

順調な海産物店は、戦争の被害を受け、運命を変えられてしまう。昭和二十年四月、「玉栄丸爆発事故」で、境港は一面



焼け野原となる。船から港の倉庫へ火薬を運ぶ途中に起きた事故だった。タバコの火が原因で、船が爆発し、その後倉庫にも引火。百十五人が死亡した。

「裸一貫になってしまった」。池淵家は、家族の命こそ助かったが、店も家財も全て失った。

### 誰もが一からの再出発

商売好きだったというおじいさんのお母さんはバラックですぐに店を再開した。ものが何もない時代。何でも売ろうと必死で農家を回って野菜や果物を集めた。おじいさんの仕事への情熱はお母さんから受け継いだものなのかと、この時気づいた。

おじいさんはそれまで地元の小学校で教員をしていたが、事故以来家の仕事を

するようになる。その時のことを「お遊びだったんだけどね」と振り返る。

モットーは「オープンな高い」。闇市が横行する時代だった。しかし、もちろん正直な定価、適正な価格で売った。それは、不正なことをして大儲けしても、すぐに駄目になるという考えからだった。

この話をしている時、おじいさんの視線が強くなっていった。これはきつと私たちに伝えたいことなんだと感じた。おじいさんの話は、商売とか、仕事とか、そういうことだけの話ではない。より良く生きていくために、大切なことを教えてくれていると思う。

「人はひとりでは生きられない。お互いに切磋琢磨することで、結果自分が伸ばせる」。その言葉を話すとき、おじいさんは、私の目をじっと見ながら、力を込めて話してくださいました。商工会議所の議員や商店会理事長を長年務めてきた人だ。みんなに慕われる人柄だからだと思

### 店名の由来

やっぱり気になるのは、「いけびんストア」と言う名前だと思う。「いけびん」って何？「ストア」じゃなくて「ストア」の間違いでしょ？ と思ったのは、私だけではないはず。

この名前になったのは、戦後、昭和二十三年のことだ。名付けたのは、おじいさんだ。「いけびん」というのは、お



じいさんのお父さんの名前、池淵敏得から来ている。本当は「としなり」と読むのだが、「びんとく」と言われることが多かった。そして、苗字と名前の頭を組み合わせて、「いけびん」とした。

「ストア」なのは、storeはストアとも聞こえ、珍しくて覚えてもらえなかったという理由だ。そうして出来上がったのが、「いけびんストア」だ。池淵という苗字をそのまま店名にしなかったのは、近所に池淵さんが何軒かいたからだろう。

そして、「びん」という発音が尻上りであること、ストアと最後伸ばす音というのは商売するのに締まりが良いということも理由だろう。この名前は、おじいさんがあれこれと頭を悩ませた末に付けられた名前だった。商売のことは何



事も気を抜きたくないというおじいさんの気持ちが読み取れた。

### 今も続くご縁

過去にここを訪れた観光客とのつながりを話された。「心と心のふれあいは販売の原点」と言われていた。十年ほど前、神奈川から来た観光客からファックスでお礼の手紙が届いた。それ以来毎年スイカの注文がくるようになった。きつといけびんでの楽しいひとときを思い出しながら食べるスイカが最高だからなのだろう。

静岡から来た観光客にお茶を出したこともあった。それから毎年新茶を送ってくれ、お礼に二十世紀なしを届ける、という関係が十年も続いているのだそうだ。いつまでも健康であってほしいとい

う願いが込められているように感じた。

こう言われるおじいさんほども謙虚な方だ。接客、品揃えの豊富さ、安さ、総合して良くないと駄目。いつも一番に思うのは、来た人に喜んでもらうこと。同じ買うならあの店で買おう、と思わせてしまう何かが、ここにはある。

おじいさんは話の途中、何度かのが詰まるようだった。それは当然で、もう二時間半も話をしてくれた。私は、申し訳ない気持ちになつてきて、「疲れましたよね?」と言った。そうすると、「若い人といると、パワーをもらえるから、平気だよ」と言ってくれた。どこまで、優しい人なんだろう。おじいさんの心の大きさに、深さに、涙が出そうになる。しっかりとお礼を言って、畳の部屋を出た。

### 心に響くおばあさんの言葉

最後にいけびんストアの店内を見せてもらった。ふと上を見るとツバメの巣を発見。そして下には糞避けのために段ボール箱の蓋が釣り下げられていた。「ツバメの巣は壊したらいけないんだって。そう言われているの」。レジに立つおばあさんがそう教えてくれた。ツバメはもういなくなったらしいが、いたころには、もっと大きいガードを付けていたと

いう。

おばあさんは背が小さくてとてもかわいらしい方だ。おじいさんの話だと、おばあさんは観光客とよく話し、印象に残る言葉を言う人らしい。おばあさんは目を潤ませて話されるから、観光客の心をグツと掴むのだろう。

おばあさんは何度も何度も「来て下さってありがとうございます」と言われた。お土産にお茶やアイスなどたくさんいただいてしまった。こんなにも歓迎していただいて、幸せな気持ちで胸がいっぱいになった。最後も私たちに暖かな笑顔で手を振ってくださいました。

(なかしげ・あや／文化資源学系二年生)



# 幻の食材を求めて

## — 斐川町出西しょうが —

伊藤 瞬



います。斐川町と出雲市の間流れる斐伊川がもたらした土壌のおかげではないかと言われています。

出西地区やその周辺では、生姜を薬味として使うだけでなく、まるかじりしたり、生姜が主役の料理にしたりして食べられています。代表的なものとして、新しょうがを千切りにして醤油とかつお節をかけて食べる食べ方や、三杯酢やらっきょう酢に漬けておいて食べる食べ方が昔からあるそうです。

ところが、私は斐川町出身なのに、このような生姜料理を食べた記憶がありません。このような食べ方があることさえ

知りませんでした。祖母に聞いたら、私の家でも生姜をそのまま使った料理を昔から食べてきたということがわかり、とても驚きました。

### 蘇る幻のしょうが

出西しょうがの起源・歴史を語るときによく引用されるのが『出雲新風土記 味覚の巻』（太田直行著、一九三八年）という本です。そこには次のようなことが書かれています。

出西しょうがの起源は、出西村が海に面していた遠い昔に九州方面から一個のご神体が漂着し、これを八幡宮として祭ったところ、社の周りに生姜が繁茂しはじめ、これを種として栽培したのが始まりとされている。風味だけでなく、風邪薬としてもとても効果があり、昔は近国の諸大名への献上品ともなり、非常に賞賛されていた。

もちろん、ここに書かれていることは、あくまでも言い伝えです。しかし、こんな言い伝えがあること自体、さすが「幻



■永戸さんから出西しょうがの話を書く筆者。2時間以上にわたって、詳しく説明していただきました。

のしょうが」といったところでしょうか。こんな出西しょうがですが、戦後はだんだん栽培する農家が減り、めったにお目にかかれない希少品になっていきます。どうも「幻のしょうが」にはこのような意味もあるようです。

そこで、出西しょうがをもう一度蘇らせようという目的でつくられたのが「出西生姜組合」です。この組合は一九九八年に組織され、現在の組合員数は三人、栽培面積は合わせて六十五アールほどだそうです。今回、この組合の代表の永戸豊さんにいろいろとお話を聞かせていただきました。

出西生姜組合結成のきっかけは、それに先立ってできた斐川町特産開発振興会だそうです。そこで「出西しょうがの面影がなくなってきたが、蘇らせたかどうか」という話が出て、永戸さんが組合を

生姜といえば、薬味として使われることが多く、あまり目立ちませんが、料理に刺激を与えるとても大切な存在です。私の出身地、島根県斐川町では「出西しょうが」と呼ばれる、地元ではわりと有名な生姜の栽培が行われています。出西しょうがが斐川町西部の出西地区という所で栽培される生姜に付けられた名前です、そういう品種があるわけではありません。小生姜と呼ばれる小ぶりの実（塊茎）を付ける品種ですが、他地域で取れた生姜に比べて繊維が少なくてやわらかく、辛味や香りが強いのが特徴です。ほんの限られた範囲内では、このような高品質のものは育たないこともあって、「幻のしょうが」と呼ばれたりして



■生姜を収穫する永戸豊さん。



立ち上げられました。この組合で栽培された出西生姜は、一九九九年にできた道の駅「湯の川」を販売拠点とします。組合ができた当時の栽培面積は十五アールほどでしたが、道の駅とともに大きくなっていったそうです。

### 驚きの生姜畑

永戸さんの家では、おばあさんの代から出西しょうがを栽培されています。その当時は栽培面積が二、三アール程度で、ねこ車を使い、お得意さんのところに売って回っていたそうです。永戸さんのお父さんも自転車で振り売りをしておられました。

永戸さんの現在の生姜畑はおよそ三十アールです。お話を聞く前に、生姜畑に案内していただきました。生姜畑を見るのは初めてです。一面生姜畑が続いていて、私が想像していたよりもずっと広がったので、とても驚きました。生姜畑からは生姜のいい匂いが広がっています。まさか葉からも生姜の匂いがするとは思いませんでした。

永戸さんにすすめられ、何本か生姜を収穫させていただきました。私は芋のように掘り出して収穫するのかと思っていましたが、ちよつと引つ張っただけです。んなり抜けたので驚きました。土から出てきた生姜を見てまたびっくりです。新生姜が横一列にくっついていたので

新生姜の下に種生姜が付いて出てきました。どうすればよいのか迷っていると、「取ってしまえばいいよ」と言われまして。「傷つけてはいけない」と思いながら丁寧に取りました。種生姜は新生姜から離れてしまつて土に残ることもありません。そのときには土に埋まつたままにしないで、手で掘り出してやります。種生姜はひね生姜とも呼ばれ、これはこれで商品になります。他の野菜にはあまりない、生姜の特徴です。

### 種生姜の保管庫は防空壕

出西しょうがの収穫は七月下旬あるいは八月下旬の暑い時期から十月まで続きます。一気に収穫してしまうのではな

く、三カ月かけて徐々に収穫・出荷していきます。収穫が始まつた頃は、新生姜は種生姜よりちよつと多いぐらいですが、十月にもなると六倍ぐらいに増えているそうです。最後に翌年の種生姜用を収穫し、春の植え付けまで保管します。

生姜はもともとインドなどの熱帯アジアが原産だとされています。暖かい所の植物のため寒さに弱く、一〇度以下になると種が痛んでしまいます。そのため、種生姜が冬を越すための工夫がされています。永戸さんの所では防空壕に入れているそうです。出西地区には戦時中に軍用の飛行場があつたことから爆撃の標的になることもあり、そのため出西の山にはとてもたくさんさんの防空壕があつたそうです。戦後、水害のためその多くがなくな



■出西しょうがうどん



■出西しょうがの甘辛煮

なつてしまいましたが、いくつかは残っているそうです。その残つた防空壕を種生姜の保管庫として使っているわけです。

### 出西しょうがが私たちに届くまで

出西生姜組合では、各組合員の畑で取れた生姜を永戸さんの家の敷地内にある作業場に集め、選別・包装して出荷します。

まず、畑で取れた生姜には茎と葉がついているので、これを束にしやすい長さに切り落とします。次に塊茎に付いた泥などを水で洗い落としますが、このとき、水を勢いよく噴射する機械を使います。洗い終わった生姜は秤に乗せて一定の重さに整え、透明なプラスチックフィルムに袋詰め、束ねていきます。そして最後に、茎と葉が程よい長さになるようにもう一度切り落とすことで製品の完成です。出西しょうがは食べることでできない茎と葉も一緒に付けて出荷されます。

出西しょうがは道の駅「湯の川」を中心に、斐川・出雲の地元スーパーなどで販売されています。その他にも、電話やFAXで注文を受け、ゆうパックで送る



■出西しょうがを抜いてみました。



■勢いのある噴水で出西しょうがを洗う。

という通信販売も行っておられます。東京など遠方からの注文もあります。発送はクール便を使います。多少お金がかかっても鮮度が落ちないことが大事です。

進物用として注文される人もいます。贈られた側としては、薬味として使うことしか知らない場合は、「量が多すぎると思ってしまう。そんなこともあって、かつては一キロ詰めていたが、今は八〇〇グラムを標準にしているそうです。また、使い切れないことがないように、生姜料理のレシピを付けて送っています。実際に作って食べた人からは、「もっと量を増やしてほしい」という声もあるそうです。

出西生姜組合はこれまでにテレビや新聞などでたびたび取り上げられていきます。朝五分だけの放送で電話が鳴り止まなくなるほどの反響があったこともあるそうです。私たちが取材に行った日も、



■(上段) 計量される出西しょうが。(下段) 仕上げに茎の長さをそろえて切る。

テレビ番組「満天青空レストラン」で出西しょうがが取り上げられ放送される前日、放映後にどれだけ注文が来るか楽しみだと言っておられました。それに備えて、取材日には作業員の皆さんが忙しいように出荷準備をしておられました。

**こだわりのお菓子「生姜糖」**

出雲市平田町の木綿街道に「來間屋生姜糖本舗」というお店があります。生姜糖とは砂糖と生姜を煮詰めて固めて作る、とてもシンプルなお菓子ですが、來間屋さんは三〇〇年もの間、この生姜糖を作り続けてこられました。甘さは控え目で、さっぱりとした甘みが口の中に広がり、とてもお茶に合う味です。

この歴史ある生姜糖にはとても強いこだわりがあり、原料の生姜は出西しょうがでないのだめだそうです。なぜなら普通の生姜だと繊維が多くて煮ても完全に溶けず、生姜特有の香りも減ってしまう

からだそうです。このこだわりを今まで守り抜いてこられ、地元の人はもちろん県外の人たちにも愛される生姜糖を作りつづけておられます。

來間屋さんは生姜糖のほかに「しょうがの砂糖漬け」というお菓子も期間限定で販売されています。

**形を変える出西しょうが**

出西しょうがからは生姜糖の他にもさまざまな加工食品が作られています。出西生姜組合で開発して販売しようと考えたこともあり、加工設備などの問題で難しかったため、加工食品専門の会社に任せています。その加工品は「生姜せんべい」(松崎製菓)、「出西生姜金山寺みそ」(大正屋醤油店)、「出西しょうが入りしょうゆ」(持田醤油店)、「乾燥生姜」(北陽製茶設備)、「出西生姜



■(上段) 出荷作業に追われる作業場。(下段) 事務所も忙しい。

私は今回の取材で、実際に見たり、食べたり、五感すべてを使って出西しょうがを知ることができました。また、生産者の方の苦労や出西しょうがに対する思いなども知ることができ、学ぶことがとても多い取材になりました。

■(いとう・しゅん／文化資源学系二年生)



ホーランエンヤ  
馬場伝馬頭取  
角田一雄さんに聞く

松本そのか



■渡御祭の朝。宍道湖大橋のたもとに集結した船団。

二〇〇九年五月、十二年に一度のホーランエンヤが開催された。福岡県出身の私は一年前に島根に来たときからずっとこの祭りを楽しみにしていたが、都合により十六日の渡御祭、二十日の中日祭は見に行けず、最後二十四日の還御祭に望みを託すことになった。

中日祭が終わった次の日から、晴れることを願って毎日天気予報を見ていた。しかし、何度見ても降水確率は五〇パーセント以上。見事に予報があたり、当日は本当に雨が降ったり止んだり。「もしかすると雨で祭りが中止になるのではないだろうか」という不安を抱きつつ会場に向かった。でも、会場に着くと私の不安は一気に吹き飛んだ。

大勢の人が傘の花を咲かせて船の登場を待ちわびていた。大きなカメラを構えて待っている人。携帯電話で暇をつぶしている人。カッパを着て飛び回る子どもたち。こんな会話も聞こえてきた。「今日が最後のホーランエンヤになーかもっしえんね」「次は生きちよーか分からんもんね」

私はこのとき改めて十二年に一度しか行われない祭り、地域の人々の密接な関係を肌で感じた。

「いーまかた」の文字、可愛らしい招待の子どもたち、そして船のきしむ音が聞こえるほどの迫力ある演技で私たちを楽しませてくれた馬潟地区。ホーランエンヤが終わって二カ月近く

が経った七月半ば、馬潟地区の伝馬頭取を務められた角田一雄さんにお話をうかがうことができた。角田さんが権伝馬船に乗るのは今回で三回目。一九八五年と九七年のホーランエンヤでは練權（舵取り）を務められた。そして、三度目の乗船となった今年のホーランエンヤでは頭取という大役を果たされたのだ。

## 馬

潟の権伝馬船には計五十三人が乗り込んだ。総指揮をとる伝馬頭取が二人、船首で歌舞伎役者のような格好をして踊る劍權が三人、船尾で女装して踊りを披露する采振りが三人、音頭を取る音頭取りが三人、太鼓が三人、手を振って見物客たちを惹きつける招待が四人、水先案内の早助が一人、舵取りをする練權が二人、そして漕ぎ手である權掻きが三十二人である。

權掻きは片舷八人で漕ぐ。だから十六人で一組なのだが、途中で交代するので倍の三十二人が必要となる。劍權と采振りは主に中学生や高校生の男子が務める。招待は小学校低学年の小さな子どもたちの役割だ。大人に混ざり、長時間の乗船は、かなり辛い部分もあると思う。

今回、招待に選ばれた小学一年生の田村陸君は、「ホーランエンヤに出て楽しかった。でも、ずっと立って手を振るのは大変だった。友だちにかっこ良いと言ってもらえたから嬉しかった」と話してくれた。「十二年後も出演したいですか」と質問したところ、「はい！ 今度は、

采振りとして参加したいです」と力強く答えてくれた。

陸君は今年、お父さんといっしょに船に乗った。陸くんのお父さんは二十三歳の時にもホーランエンヤに出演したことがあり、今年で二回目の参加となる。前回は今回も權掻きの役を担当した。お父さんといっしょの参加は、陸くんにとって心強かったに違いない。このように父から子へ、そして孫へとホーランエンヤの伝統は受け継がれていくのだろう。

## ホ

ーランエンヤの準備は前年から始まる。一番大変なのは人選。どの地区でも少子化が進み、人集めが難しくなってきた。馬潟地区は五大地（権伝馬船を出す馬潟・矢田・大井・福富・大海崎の五つの地区のこと）のなかでは世帯数が多く比較的恵まれているが、それでも回を重ねるごとに人選が難しくなってきた。

ホーランエンヤが開催された年に生まれた子は「ホーランエンヤの子ども」と呼ばれるそうだ。十二年後には十二歳になる。劍權・采振り・太鼓は十二歳ぐらいが基準とされているので、「ホーランエンヤの子ども」は次回、これらの役の中心を担うことになる。ただ、最近では少子化のため対象年齢を高校生ぐらいにまで広げているそうだ。

二〇〇八年十二月、寒さが一層厳しくなった頃、出演メンバーの顔合わせが行



■花笠をかぶった招待の子どもたち。中央に立っているのが伝馬頭取の角田一雄さん。

われ、練習が始まった。練習は週三回で計六十回くらい。ホーランエンヤ出演が初めての人は、まさかこんなに練習するとは思っていなかったようで、最初に配った日程表を見て、「これ何ですか?」と言った人もいたという。しかし、練習

を重ねるたびに全員の顔にやる気が見えてきた。日を重ねるごとに、伝統の重みを感じるようになった。気がつけば、乗船するすべてのメンバーが同じゴールを目指すようになっていた。初めは嫌々参加していたメンバーも、「ぜひ、また出演したい」と話しているようだ。

「最初は見るにたえなかった」——角田さんの感想である。十二月から練習は始まったのだが、すぐに船に乗るわけではない。まずは、公民館などでの練習からだ。歌の練習をしたり、テンプルに竹をつけて櫂の練習をしたりする。二月末に市からの船の引き渡しが行われ、いよいよ三月から乗船しての練習が始まる。しかし、子どもはまだ乗船できない。船を動かすことは出来るのだが、どこに行きか分からないという状態だったため、子どもが乗船して踊ったりすることはとても危険だったからだ。

四月になって、ようやく全員の息が合い、船の動きも安定してきた。真っ直ぐに進めるようになり、やっと子どもたちも乗船することができた。乗船できたといっても、今までの公民館での練習とは違う。揺れる船の上での練習、川に落ちてしまうかもしれないという恐怖。やはり最初は、思っていたように踊れない。特に、体を大きく反らせて踊るのは怖かったであろう。しかし、そんなことを言っている暇もない。本番まであと一カ月。踊り子たちは、これまで録音の音源

に合わせて練習をしていたが、今度は櫂に合わせて踊ることになる。

**本** 番まで十日余りとなった五月四日、傘揃いが行われた。傘揃いとは本番さながらの衣装を身につけての船上練習のことで、地元の人たちへのお披露目の意味も込められている。半年の練習の成果を試す日だ。この時には、一人

一人の技量はほぼ一〇〇パーセントに達しているのだが、みんなの組み合わせが難しいそうだ。残りの期間で、どれだけ全員の息を合わせたパフォーマンスを披露できるか、出演者全員が心配していたに違いない。

ホーランエンヤは男の人だけの祭りだと思っている人もいるのではないだろうか。しかし、それは違う。ホーランエンヤは女性の力なしには始まらない。確かに女性が表舞台に立つことはないのだ



■酒樽の上で華麗に舞う采振り。

が、舞台裏では女性たちが大活躍している。例えば、出演する子どもたちの母親は、

出演が決まったその日から、風邪を引いたり怪我をしたりしないように、子どもの体調管理に気を配る。また、子どもたちがかぶるカツラは激しい動きに耐えられないように、頭にぴったり合ったものでなければならぬ。このため、カツラは京都まで子どもたちを連れて行って作るのだが、たいてい母親が連れて行くことになる。さらに、着付けも女性が担う大事な仕事である。「女性たちは一緒に船には乗れないが、いつも側面で見つよに動いてくれている」と角田さんは語っておられた。

**午** 前三時。まだニトトリも鳴かない時間から、私たちの知らないところでホーランエンヤが始まっていた。子どもだからといって、寝坊などは許されない。たとえ小さな小学生であっても、

船の上に乗る限り、役者なのだ。本番も直前までにしなければならぬことがたくさんある。メイクに着付け、そして最終確認。午前七時、馬潟地区の出発式が行われた。船が発する時と到着する時には、地域の方々が見送り、出迎えてくださる。角田さん曰く、「これらの式もかなり見ごたえがあり感動しますよ」。

「昔からの伝統芸能や伝統行事がそれぞれの地域にあるはず。若者はその伝統



■神輿船（左後方）を曳く馬潟の權伝馬船。これは「いーまかた」だけに与えられた役目で、馬潟の人々の誇り。

## 馬潟の練習風景

小數賀由紀

私は馬潟に住んでおり、家の窓からは大橋川が見えます。だから、ホーランエンヤの練習風景を何度も間近で見ることができました。

太鼓の音とホーランエンヤのかけ声が聞こえてくると、私も近所の方々も、練習している姿に足を止めて見入っていました。私が初めて練習しているところを見た頃は、あの独特な声の調子はありませんでしたし、声も小さかったので、何と歌っているのかよくわかりませんでした。しかし、日が経つにつれてみんなの声が揃ってきて、上達していくのがこちらにもわかりました。休日だけでなく平日も、辺りが暗くなっても、ずっと練習しておられるのを見て、ホーランエンヤにかける熱い思いが伝わってきたものです。

後日、馬潟の伝馬頭取さんにお話をうかがったところ、「みんな仕事とかけもって練習していたから、全員揃って練習できたのは二、三回しかなくて、本番は不安だらけで出発しましたよ」とおっしゃっていました。還御祭の日は雨が降っていたのでどうなるのだろうと心配しましたが、雨に負けず堂々とした歌と舞を披露しており、とても感動しました。

を継承し、守っていつて欲しい」——角田さんからのメッセージだ。地方では若者がだんだん少なくなり、地域の行事に参加する若者も減っている。自分の生まれ育った地域についてどれだけのことを知っているのか。「あつて当たり前」「誰かがしてくれる」ではいけない。地域が一丸となって自分たちの故郷を守っていかなければ……。

ホーランエンヤは十二年後どうなっているのだろうか。五大地の子どもたちはホーランエンヤに対する関心、思いは変わっていないようだ。出演しない小さな子どもでも、踊りを踊れるという子どももいた。何度も練習風景を見ているうちに自然と覚えたそう。このような子どもも

ちが大きくなって立派な舞を披露してくれるのだろう。

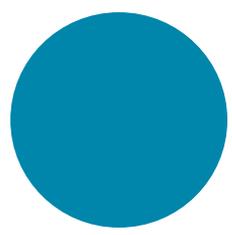
それでも、人の確保の問題はやっぱり深刻だ。今回もそうだったように、今後はますます地域外に居住する血縁者に頼らざるを得ないことになるだろう。そうになると、練習に通う子どもたちの送迎をはじめ、一層たくさんの人たちの協力が必要になってくる。でも大変な分、地域が活気づき、明るくなるといふ効果があるはずだ。十二年に一度しかないホーランエンヤは日本一の祭だと角田さんは胸を張る。十二年後、パワーアップしたホーランエンヤを見学するのが今から楽しみだ。

（まつもと・そのか／英語文化系二年生）

# 街のおもしろ

～その四～  
倉吉編

## 文化観察学



安食香奈

第四回目に突入した連載「街のおもしろ文化観察学入門」。今回は少し足をのばし鳥取県倉吉市に出かけました。七月四日、天気はだいじょうぶ。私たち観察隊一行八人は、一時間半ほどバスに揺られて、倉吉に到着しました。

到着してすぐにお目当てのものを発見。「さわやかトイレ」です。実は私はひそかなトイレマニア。倉吉はトイレの教育が盛んであるというのを聞いていたので、とても楽しみにしていました。「さわやかトイレ」の前で記念写真を撮って、いよいよ探検に出発!!

**えっ? 「たこ」が「いか」?**

少し行くと、お店の前に大きな凧が飾ってあるのが私たちの目に留まり、中



■「さわやかトイレ」の前で写真撮影。

に入ってみることにしました。店内にもたくさん凧がところ狭しと並んでいいます。店のご主人に凧にまつわるお話を聞かせていただきました。

凧は元々、「いか」「ようず」「はた」という名称で関西で作られていたそうです。しかし、江戸っ子は対抗心が強かったために、関東でも「いか」にかわる「たこ」が作られるようになりました。倉吉には今も「倉吉いか」と呼ばれる「たこ」があります。上部がひし形になっていて、いかに形をしている珍しい凧です。

**元は銀行?**

今までは和風の建物が建ち並んでいましたが、いきなり洋風の建物を発見。「ここは銀行だったのではないか!」という予想を胸に、いざインタビュー。お話を伺っているうちに、この建物は元々、昭和六年に建てられた「日本産業貯蓄銀行倉吉支店」であるということが分かりました。この長い名前はお店の方もなかなか覚えられず、「観光ガイドが来るうちに覚えた」と笑いながら話しておられました。

しかし、銀行としての役割はごく短期間で終わったようです。今は内部を改装し、「ぎやらいい和」という染物や雑貨のお店になっています。

銀行のマークが特徴的で、星の形をしています。私も初めて目にしたマークでした。以前店に来た観光客で、銀行のマークに詳しい方がおられ、その方が言うには全国でこのマークがあるのは三か所だけとか。

旧銀行と言えば、倉吉大店会の建物もそう。「このマークは松江にもあるぞ!」と編集長。見つけたのは、『のんびり雲』



■(左上) 店の入口に飾られている凧のべろは魔よけの効果があるそう。(上) ご主人は凧の製作中でしたが、手を止めてくださいました。



■ (上) ぎやらりい和の中は、古いたんすが置いてあるなど、昔を感じさせる造りになっています。(左上・左下) 倉吉大店会の建物。国登録有形文化財です。

第一号でも取り上げた「三」の字が入っている鬼瓦でした。倉吉大店会の建物は松江のかげやま呉服店と同じように、第三国立銀行のものです。「まち歩きガイド」には、「山陰地方に現存する土蔵造り銀行建築の中でも最も優れたもの」と書かれています。

**どうして斜めなの？**

倉吉大店会を後にし、そのまま真つす

ぐ歩いていると、佐々木新生堂というお菓子屋がありました。和菓子好きの編集長が立ち寄らないはずがない、と見ていると、やつぱり入っていきました。実は、ここは以前から気になっていたお店だそのうです。

「ガラス戸の上の部分斜めになっていますが、どうしてですか？」  
「これは庇の支えで、昔は名前が書いてあり、中に照明がつくようになってまして……。しかし、これと

私たちは意味がないという意外な答えに驚きましたが、じつと観察すると、かなり斜めになっていて、面白い造りであると思いました。

佐々木新生堂は昭和三年から続いていて、現在で三代目だそうです。しかし、今年中にはお店を閉めようかと考えておられました。昔は倉吉にも三十軒くらいのお菓子屋があったそうですが、現在は十五軒くらいに減ったそうです。

武家屋敷を通り過ぎ、ふと下を見るとマンホールの蓋に「くらしのコミュニケーション水」と書かれています。島根では見

たことがなかったの少し驚きつつも散策を続けました。

そして、今度は上を見上げると公民館の壁に赤と青の鮮やかなマークがくっついていています。「どうして公民館にこんな鮮やかなマークがあるのだろうか」と疑問に思いながらも、写真を撮ってその場を後にしました。

**待ちにまつたお昼休み!**

そろそろお楽しみのお昼にしようということになり、私たちはお食事処を探しました。まず見つけたのは、そば屋です。ここで二グループに分かれて行動することになりました。もう一グループは大弁天に立ち寄り、「倉吉レトロまちかど博物館」にも指定されている「あかね屋」という洋食屋へ行きました。

しかし、ここからの二グループの様子は分かりません。実は私はこの記事を担当することになり、プレッシャーから何かよく分かりませんが、食欲がなかつ



■ (上段・中段) 佐々木新生堂。(下段) マンホールの蓋。水という字の右側の「」は何でしょう？





■（上段右）東町公民館の色鮮やかな町紋。この町紋は、波と日輪をイメージしているそう。（上段左）大弁天に立ち寄るメンバー。どんなお願い事をしたのが気になりますね。（下段左）洋食の「あかね屋」で食事のメンバー。

年鯉を見てきたけど、鯉が跳ねたのを見たのは初めてだわ」とおっしゃいました。ラッキーな出来事に遭遇し、興奮していると、みんなが食べ終わったとの連絡があり、合流しました。

### 謎のマークの正体？

駐車場の看板に紋章が!? 驚きと同時に、今までの疑問が解けた瞬間でした。この看板には三十個もの紋章が描かれていました。あの公民館のマークもありました。看板には「倉吉町内の紋所」と書かれており、「祭礼や共同作業、消防作業などの時、他町と区別する目印として用いられた」と説明されています。

通りを歩いていくと、音符が埋まって

るのか?」「ケロリンの風呂桶はあるのか?」「コーヒー牛乳は飲めるのか?」など、様々な想像が膨らみました。古くて味わいのある建物なので、ぜひ今度行ってみたいと思います。

### 大きなカンナのある店

「見て！見て！屋根が変わったよ」という声が聞こえてきました。正面の建物を見ると、なかなか言葉では説明できない変な形をしています。小松履物店という古いお店です。これは何か深い理由があるのでないかと思い、インタビューをしてみることができました。

「こんにちは」

「……」

いたり、止マレの文字が埋まっていたり……。曲がり角で銭湯を見つけました。角の柱に「レート白粉」という変わった広告看板があります。入って帰ろうという人もいました。が、四時半からの営業開始なので、諦めました。しかし、中がどうしても気になります。「富士山の絵がドーンとあ



■（上段右）小松履物店の変わった形の屋根。（上段左）メンバーが「小人の靴屋にこんなものありそう」と言った、靴製造器具。（中段）焼印。（下段）下駄製造用大鉋。



「すみませーん」

なかなか応答がないので半ば諦めかけていましたが、何回か呼んでいるうちに出てきてくださいました。「おたくの屋根はどうしてあのような形をしているんですか?」

「三階建てだけど、大工さんの計算でああなったので何とも言えません」

前のお菓子屋さんと同様に、またまた深い理由を聞くことはできませんでした。

しかし、次の質問から次々と新事実が分かり、とても驚きました。

「この屋根が倉吉レトロまちかど博物館になった理由じゃないのなら、どこが

認定されてるんですか?」

「前に展示してある鉋かんですよ」

お店の入り口を見てみると、確かに下駄製造用大鉋や焼印などが展示してありました。倉吉レトロまちかど博物館の旗があるところには、その家の宝物が展示されているというのを聞き、どうして今まで気付かなかったのだろうかとちょっと後悔しました。

お話を伺っていると、親切にも実演をしてくださいました。鉋は固定しておいて下駄を動かして削っていたそうです。焼印は下駄にお客さんの名前を打つためのものです。そして、靴の製造器具を見てメンバーが、「小人の靴屋の絵本にこんなやつなかったっけ?」「あったか



■（上段）駐車場で見つけた紋だらけの看板。  
（中段・下段）町紋について熱心に語る平さん。



も！」というやり取りをしているのを聞き、童心に戻った気持ちになりました。

### 町紋博士の平さん

小松履物店を出ると、すぐに雨が降ってきました。「晴れているのに雨？」と不思議に思いながら歩いていると、「中で雨宿りでもしていったらどうですか？」と親切に声をかけてくださる方がいて、ご厚意に甘えさせていただくことにしました。

そのお店は「人形・玩具・花環・記章」の看板を掲げた「たいら商店」。ご主人の平守さんは町紋の調査・保存に取り組んでおられて、町紋にとっても詳しい方でした。

今まで気になっていた、道端で見つけた町紋や駐車場の看板にあった町紋について聞いてみました。

「なぜ、それぞれの町にマークがある



■私は銭湯というものを初めて見ました。松江にも銭湯がりましたが、最後の一つも二年前に閉店しました。

んですか？」

「町を活性化させるため、それぞれに由来があるんですよ」

この町紋は、江戸時代中頃に栄えた町人まちだけに付けることが許されていたそうです。そして、ファイルに入っていたくさんの町紋と資料を見せていただきました。町紋を集めるのにはかなり苦労さ

れたようで、消防団や青年団の団旗を調べたり、高齢者の方から聞いたりしたそうです。様々な苦労を経てここまで解明されたということを知り、文化資源の素晴らしさ、そして平さんの文化資源発掘への熱意を感じる事ができました。

倉吉の街を散策していて疑問に思っていたことがやっと分かり、すっきりしました。取材に集中していると、メンバーがいらないことに気付きました。外で声がしたので見てみると駄菓子屋があり、そこで子どもと一緒に遊んでいるではありませんか。

### 懐かしの味

ここでちょっとだけ寄り道を

をしました。きつとメンバーが一番楽しかったであろう思い出の場所です。店先には大きなウルトラマンの人形が飾られていました。買ったものを見せてもらうと、一人一人がカードを持っていました。猫まんま調理資格免許証などの職業が書いてあり、昔流行った(?)なめ猫が載っていました。

散策の最後に立ち寄ったのが倉吉ふるさと特産館です。倉吉に行ったら必ず食べたいと思っていた「打吹公園だんご」



■（右下）駄菓子屋。メンバーは懐かしの駄菓子をほおぼり、とても満足そうでした。

をメンバー全員で食べました。もちもちとしながらも、さらっと口どけのよいお団子でした。

今回の「街のおもしろ文化観察学入門」は倉吉でしたが、実際に散策をしてみると、本当に町全体が「ようこそ！」という雰囲気、とても親切な街であると感じました。古い建物・景観が残っている歴史ある街で、何回でも訪れたいくなる、そんな街です。

（あじき・かな／文化資源学系二年生）

# 編集後記

わたしが編集部に加わった一番の理由は、大試食会でいろんなものを食べたい！という少々不純なものでした。残念ながら一年生は大試食会に参加できず……。けれどもその無念を晴らすべく、多くの取材に同行し、その先々で塩ソフトや「ぬりかべバーガー」などにありつけたので、これはこれで満足です。

また取材をするにあたり、地元の米子市の歴史について勉強する良いきっかけとなりました。メインの取材でも、米子駅では転車台を実際に動かしていただいたり、後藤総合車両所では間近で列車の部品を見せていただいたりと、貴重な経験をすることができました。こうして形にすることができたのも、忙しいなか時間を割いてくださった取材先の方々や編集部みんなのおかげです。

記事を書くのは想像以上に難しく、苦労も多かったですが、来年もまた編集に加わり、そして何より大試食会に参加したいです。(愛季)

「なんか面白そう」と、気軽に編集部員に志願しましたが、実際は想像以上に悪戦苦闘でした。まず、テーマが「鉄」。正直、最初に聞いた時は、「なんで？」と思いました。だが、鉄についての資料を見、いくつかの取材についていくうちに、「鉄って面白いかも」と感

じ始めたのです。なんでもそうかもしれないですが、鉄もいろいろな顔を持っていて、生み出される時の荒々しい鉄から、人の手が入った馴染みある鉄まで、実に様々な「鉄」を楽しむことができました。

引つ込み思案な私にとつて、インタビューは大きな壁で、取材先の方は私のつたない質問によく温かく応えてくださったなあと思います。一番興味を持っていた誌面レイアウトも、思ったより難しく、編集長に頼りきりになってしまいました。振り返ってみると、助けられてばかりでした。でも、編集に携わって、鉄という一つのものをより深く、裏側から見る視点を持つことは、私にとつて今後に繋がる貴重な体験になったように思います。(紗織)

念願の県外ということで臨んだ取材。最初は、これまで二、三人で書いていた記事が果たして一人で書けるのか？という不安がありました。そして、当日の緊張も最高潮でした。そんな中、倉吉の方のユーモア溢れる話を聞いたり、親切にふれるたびに、なんとか私にも書けそうだ！と思えるようになり、街のおもしろ文化観察も楽しくなってきました。

しかし、学校に帰ってから予期せぬアクシデントに見舞われました。写真は三百枚近く撮ったのに、数日後ファイルを開いてみると、中はもぬけの殻でした。バックアップをとっておけば……。これから編集部員になる方にはこんな悔しい

思いをしてほしくないの、是非バックアップをとりましょう」(笑)と伝えたいです。

悔しさは隠し切れなかったのですが、編集部員みんなはとても優しく、自分の撮った写真を快く提供してくれて、本当に助かりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

また、みんなで街のおもしろ文化観察に行きたいなあと思う今日この頃です。(あじ)

「この前、家族総出で稲刈りをしたに」——これを友達に話すと、「わざわざ邑南町にまで農業体験に行かなくてもよかつたがね！」とつっこまれました。そう、私は自分の家が農家であるにもかかわらず、邑南町の田舎ツーリズムの取材に同行させていただいたので、確かに、農業をすることは自分の家でもできたかもしれませぬ。しかし、邑南町での農業体験は私を大きく成長させました。

私は毎年この時期になると、「稲刈り〜!? 手伝わないけんのか？」と不満を言っていました。しかし、今年は「いつ稲刈りする？ 晴れーだーかーね？」と自分から話題を持

ち出していました。例年と違う自分の態度に気づいたシャイな(?) 私は、家族に対して恥ずかしいと思うほどでした。邑南町でトラクターに乗せていただいた経験を生かし、生まれて初めてコンバインを運転しました。そして袋にだんだんと貯まっていく粉を見ながら、農業の楽しさややりがいを感じることもできました。

これも、邑南町でお世話になった石橋家のみなさんのおかげです。また絶対会いに行くけん!! 元気であってね。(ぐっち)

『のんびり雲』は島根県立大学短期大学部・総合文化学科の学生と教員が共同制作する文化情報誌です。合い言葉は「小さな文化に注目」「地域の文化資源を掘り起こす」「世界に目を向ける」です。みなさまのご感想・ご提案をお待ちしております。

## のんびり雲 第3号

2009年10月20日発行

編集 「のんびり雲」編集部

☑責任者: 大塚 茂

e-mail: s-otsuka@matsue-u-shimane.ac.jp

TEL. 0852-20-0208

発行 島根県立大学短期大学部

松江キャンパス

総合文化学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社

挿絵 渡部優子 福田紗織

制作協力 小泉 凡 小倉佳代子

制作指導 鹿野一厚 大塚 茂